

史の杜

F U M I n o M O R I

15

東北大学東北アジア研究センター
上廣歴史資料学研究部門ニュースレター

CONTENTS

- ✳ 古文書のひろば …………… 須賀川市相楽家文書にみる郷士の日常生活
- ✳ 歴史資料をひもとく …………… 農山漁村経済更生計画と尿尿処理
- ✳ 地域との歩みのなかで① …………… 学校資料の調査の経験から
- ✳ 地域との歩みのなかで② …………… 吉野作造記念館の文書資料
- ✳ 上廣歴史資料学研究部門 2025年1月～12月

古文書のひろば

須賀川市相楽家文書にみる郷士の日常生活

須賀川市相楽家文書の目録作成作業に携わり、様々な内容の資料にふれる機会に恵まれました。郷士として地域の行政運営を担った当家に伝来する膨大な資料のなかには、商人や職人から送られてきた領収証類も含まれています。一見雑多に見えるこれらの一枚一枚を注意深く読み解くと、須賀川で活動した商人や職人の様子、そして相楽家の人びとの日常生活の一部が浮かび上がってきます。

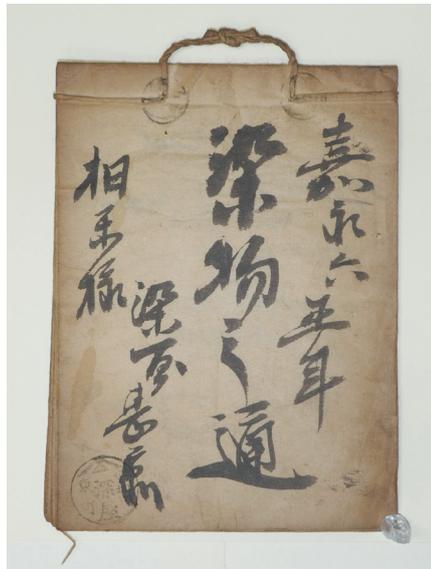
私がとくに興味を持ったのは、織物や染物の代金支払いに関する資料です。相楽家は八木屋・伊勢屋・仙臺屋といった屋号の呉服屋から、「玉紬」「しろ縮緬」「花錦」などの各種織物、巾着や手袋などの装飾品を購入しています。領収証では染・縫・仕立などの加工費が計上されているものもありますが、これらは相楽家から職人へ直接依頼することも少なくありません。

嘉永6年（1853）、東町の染屋仁兵衛という人物から届いた「染物之通」（【写真1】）をみると、布地のほかに「千草糸」「小納戸糸」など、糸の染め代を支払っていることがわかります。相楽家が作成した覚書や帳簿類においても、様々な品物代金と合わせて「仕立代」や「染代」、そして「糸代」がしばしば確認されます。定期的にある程度まとまった量を購入したとみられる糸の用途は何だったのでしょうか。

ここで、嘉永5年（1852）に相楽治左衛門が江戸深川の内藤忠次郎へ宛てた書状の下書（【写真2】）をみると、江戸滞在中に世話になった御礼を述べた後、内藤の「御姉様」から調達を頼まれた「地絹」について回答しています。須賀川に帰着した相楽は織元を二・三軒廻り、いずれも賃機であるためこちらから絹糸を渡せば織り出しは可能ではありますが、糸代が高騰しており、かなりの高額となるため当

年中は見合わせたほうが良さそうです、と「御姉様」へ伝えてほしいということです。

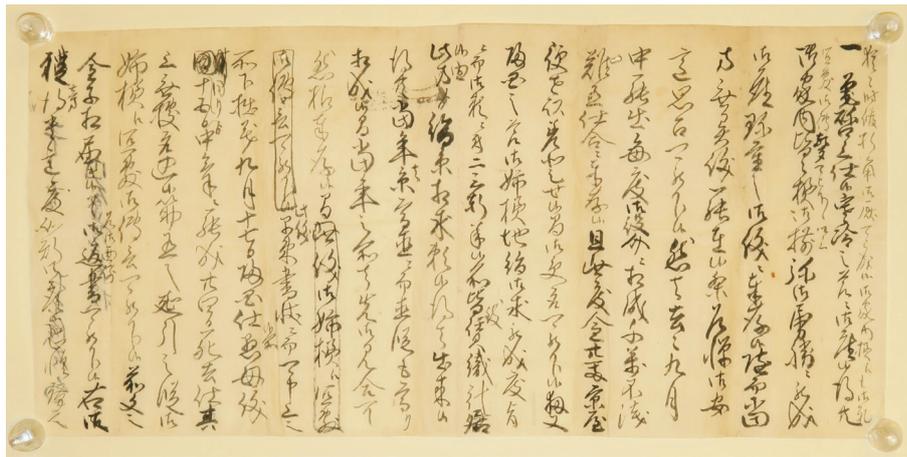
これらの資料から、相楽家が購入した糸を須賀川町内の織元へ渡していた様子がかがえます。呉服屋が各地から仕入れたほか、このような地場産の織物も着用したのでしょう。



【写真1】嘉永6年（1853）染屋仁兵衛より「染物之通」

目録を作成するなかで生まれた小さな疑問は、思いがけず解決のヒントを得ることがあります。今後も一つ一つの資料との出会いを大切に、できるだけ多くの情報を引き出せるよう丁寧に向き合っていきたいと思います。

（寺内由佳）



【写真2】嘉永5年（1852）内藤忠次郎へ書状案

歴史資料をひもとく

農山漁村経済更生計画と尿尿処理

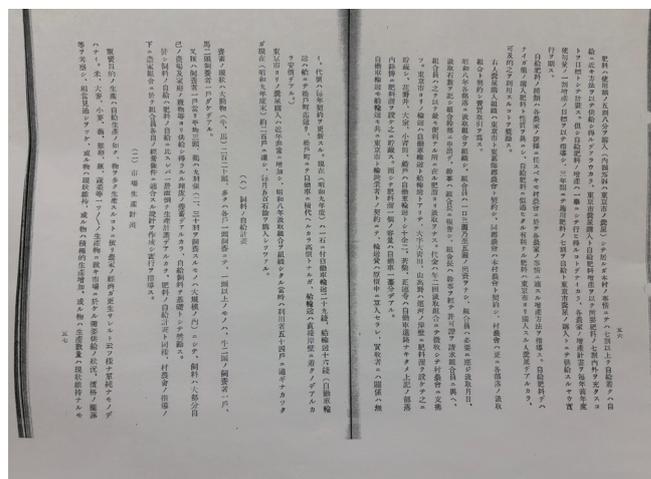
「自給肥料ではないが他の購入肥料と性質を異にし、自給肥料に似通ひたる有利なる肥料は東京市より購入する人糞尿であるから、可及的之を利用することを奨励す」

【写真1】の資料では、昭和恐慌後の経済更生計画を実現するために、安価に利用できる東京市の尿尿（人糞尿）が注目されていたことが示されています。田中村は1932年8月の第63臨時国会で経済更生計画指定村とされ、積極的に自給肥料を利用することにより、現金支出の縮小を目指していました。

近世から近代の日本において、尿尿は肥料として農村で利用され、稲作、野菜栽培などに利用されていました。尿尿は肥料としての価値を有していたため、農民や尿尿汲取業者は、対価を支払って、尿尿を購入していました。

その後、大豆粕、硫安などの購入肥料の供給量の増加、宅地から農地への輸送費用の上昇により、尿尿の利用頻度は低下することになりました。しかし、昭和恐慌に伴う農村不況により、より安価な肥料を求める必要が生じ、前述

の田中村のように、自給肥料に準ずる肥料として尿尿を有効活用しようという機運が高まります。近隣に尿尿の供給地を持たない千葉県や埼玉県の農村は、一大供給地である東京市の尿尿を利用することにより、より経済的に野菜栽培



【写真1】帝国国会『千葉県東葛飾郡田中村経済更生計画』（1935年）

を行おうと考えました。

埼玉県『昭和十年度経済更生計画樹立町村に於ける経済更生計画概要』（1936年）、「指定町村を訪ねて」『更生埼玉』第8号（1937年2月）によれば、埼玉県南埼玉郡の内牧村、和土村、日勝村においても、肥料費を節約するために、自給肥料増産の一環として、尿尿の配給が行われていました。大豆粕、硫酸などの購入肥料が農家経営を圧迫していたため、尿尿貯溜槽の建設、尿尿購入量の拡大により、肥料費を削減しました。日勝村では、後述する東京市の尿尿処理市営化を機に、一年間に施用する購入肥料の総額を12万円から8万円余りに減少させており、経済更生計画を実現する上で東京市の尿尿が重要な役割を果たしていました。

他方、東京市の尿尿処理市営化に関する【写真2】の資料を見てみると、「昭和五年五月汚物掃除法改正に伴ひ尿尿処分は市の義務となりたる処本市は諸般の実状を勘案し第一次計画として昭和九年十一月一日より旧市域の市営を実施し、新市域に付ては事情を異にするものと尚調査を要するものありしを以て昭和九年十月東京府、警視庁告示に依り更に二年間の猶予を認められ今日に至りたるも、本事業の統制並円滑なる運用を期する上に於て昭和十一年十一月一日より大要左の計画に依り実施せむとす」とあります。東京市では、人口増加、宅地化の進展により、農民や尿尿汲取業者だけでは市中心部の尿尿が処理できなくなり、市営汲取をする必要に迫られました。

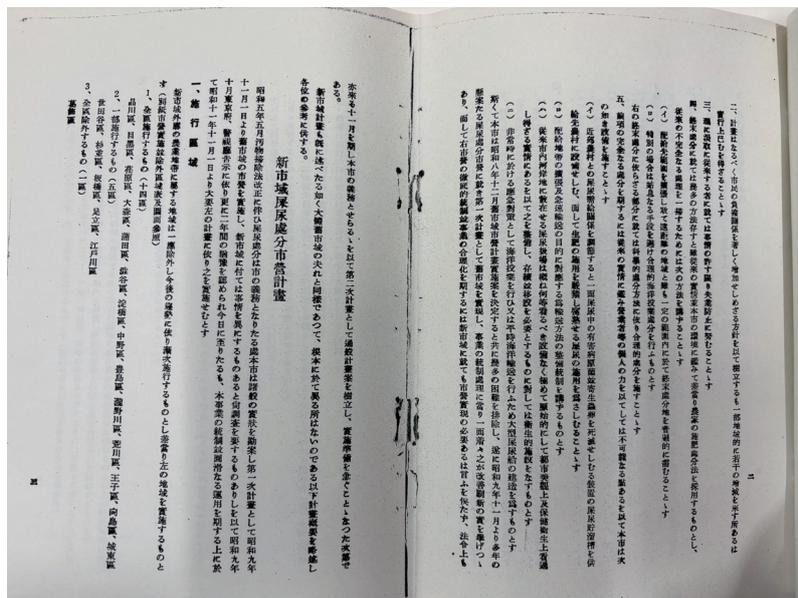
東京市は、1934年に旧市域において尿尿処理市営化を実施し、汲み取った尿尿を千葉県、埼玉県などの近県

農村に供給しました。その際、尿尿の施用状況や自動車輸送に関する調査を行い、尿尿の供給先を遠隔地の農村まで拡大しました。東京市は尿尿供給契約を結んだ農会に対して、尿尿貯溜槽建設交付金を支給し、尿尿を長期間貯蔵できるようにしました。貯蔵することにより、細菌や寄生虫卵を死滅させ、感染症、寄生虫症の予防を目指すとともに、季節を問わず大量に運搬できるようになり、輸送費用の節約にもつながりました。

その後、東京市は1936年に新市域の尿尿処理市営化も実施し、より広範囲の地域に尿尿を供給するようになりました。1932年に東京市に編入された地域の中でも農村地域が多い葛飾区や新市域の外郭部は、市営地域から除外されたものの、都市化の進展に伴い、徐々に市営地域を拡大する計画が立てられました。

このように、農村側、都市側双方の資料を見ることにより、多面的に尿尿処理の変化を明らかにできました。安価な肥料としての尿尿を必要とする農村と尿尿の滞留に苦慮する都市の双方の利害が一致することにより、農村不況と都市の衛生問題の緩和が図られました。現代のリサイクルと同列に扱うことはできないと思いますが、あるものを不要とする人がいる一方で、それを必要とする、あるいは加工しようとする人がいるという状況は現代にも共通することです。今後は尿尿だけでなく、塵芥や金属屑、古紙などの資源ごみにも研究対象を広げ、歴史から得られる知見を現代にも生かしていけたらと思います。

（琉球大学国際地域創造学部 星野高德）



【写真2】東京市役所『新市域尿尿処分市営計画に就て』（1936年）

地域との歩みのなかで①

学校資料の調査の経験から

2009年から始めた宮城県内学校資料の調査も、17年目に入りました。この間、調査を行った自治体数は23にのぼります。調査未了の自治体数は11ですから、県内のおよそ三分の二の自治体の調査を終えたこととなります。

対象としたのは、主に小学校ですが、中学校でも調査を行いました。中学校は、「6・3・3制」が始まった1947年度の開校なので、「15年戦争期の教育現場」を知ろうと思って始めた調査からは外していました。しかし、調査を進めるなかで、中学校にも戦時中の資料が保管されていることに気がきました。それは、小学校の敷地内に併設されていた「青年学校」の資料が、新制中学校の設立と同時に、小学校から移管されることがあったためです。

調査では、各学校から提示された「整理の及んでいない古い資料」を出していただき、分類、年代整序を行い、

表紙の撮影を行って目録を作製します。「日誌」類が保管されている場合は、昭和21年（1946）度のものまでは全ページ撮影を行います。そのほか、「視学視察簿」や、「公文書綴り」なども全ページ撮影を行います。撮影したデータはすべて作製した目録とともに、各学校、調査の窓口となっていた教育委員会（主に文化財課）、資料館、博物館等にお届けしてきました。

収集した日誌画像データは、延べ年数にすると1500年度分を優に超えます。日中全面戦争の始まった昭和12年（1937）度から昭和21年（1946）度までの日誌記述は、そのほほすべてを「日誌抜粋」としてワード文書で整理し終えています。現在は、満洲事変の起こった昭和6年（1931）度にまで遡って抜粋製作中です。作り終えた「日誌抜粋」は、私のゼミで戦時中のことで卒論を書きたいとい



【写真1】気仙沼市立浦島小学校調査での児童への学校日誌の説明（2011年3月1日）



【写真2】森町大内小学校での閉校記念展展示作業（2022年2月10日）

う学生に提供し、様々に卒論研究が進められ、次第に「15年戦争期の宮城県」の状況がわかってきました。

当時の小学校は地域の方々と密接につながっていました。そもそもその設立からして、地域の方々の財政負担、労力奉仕で実現するという状況でした。地域の方々にとっては、「私たちの地域の学校」であり、公民館やコミュニティセンターのなかった時代、学校がその役割を果たしていました。ですから、学校日誌には、学校行事、教育活動だけでなく、地域の様々な行事の記録、青年団や婦人会、在郷軍人会など各種団体の集会在記録されています。まさに小学校は地域の公共施設だったのです。

当初期待していた、「学校にどのように戦争が入り込んできたのか」を知るにはこの上ない資料であることが鮮明になると同時に、地域史の資料として第一級資料であることを確信するようになりました。このように貴重な資料を私ただけの「卒論のネタ」にしているのは申し訳ない。調査を始めてすぐにそう思うようになったのですが、決定的だったのは調査2年目に遭遇した「東日本大震災・津波」でした。最初の調査地として、膨大な資料に遭遇し、調査のイロハを教えてもらった気仙沼市内各所の被災直後の光景は忘れられません。気仙沼で実家を失ったゼミ生もいて、彼女が卒業する2014年2月、蒐集した資料をもとに気仙沼市中央公民館で展覧会を開きました。日誌が残っていたすべての小学校の日誌から6点ずつ選び、パネルにして展示しました。仮設住宅に暮らす方々に、少しでも「昔の思い出」に浸っていただけたら、そう思って展覧会を作りました。来場者が私たちの予想もしなかった部分を見て盛り上がっているのに驚かされました。日誌のどのような記述だと思われますか。何と、日直、宿直の先生方のお名前を見て盛り上

がっていたのです。学校資料は、学区に暮らす方々にとっては、自分の人生をたどるよすがとなる貴重な存在であることに気づかされました。

その後、気仙沼市内で閉校する小学校があると聞くと、学校資料を使った展覧会を作ってきました。ただ、震災後、一番早く閉校した浦島小学校には何もできなかったことが今でも悔やまれます。8校の小学校を2校に再編統合するという、とてつもない事態が丸森町で進められていたときには、2校に150点ずつの本展示を制作したほか、学校が地域からなくなってしまう残り4校には、それぞれ50点ずつパネルを作ってお届けしました。最近では、蔵王町で調査報告を兼ね、パネル展を開催しました。蔵王町と言えば、大正11年（1922）7月、写生の授業で訪れた白石川河畔で、川に入り溺れた児童を救おうとして自らの命を失った小野さつき訓導の殉難がよく知られていますが、宮小学校に保管されていた日誌と、大崎市内の調査で発見した、葬儀への参列や、事故から僅か20日後に上映された映画を児童に見せたことを記録した学校日誌を並べて展示し、事故が当時の教育界に及ぼした影響の一端を示すことができました。

学校資料は、地域の方々に見て、知っていただいて初めて、その本来有する資料としての役割が発揮されるものだと思います。あと2年半、調査をどこまで広げ資料を集められるか、集めた資料をどのように地域に還元し、そして未来に伝えるか、大きな課題を背負ってしまいました。

（宮城学院女子大学人間文化学科 大平聡）



【写真3】気仙沼市立中井小学校で閉校記念展を見る児童（2024年3月6日）

地域との歩みのなかで②

吉野作造記念館の文書資料

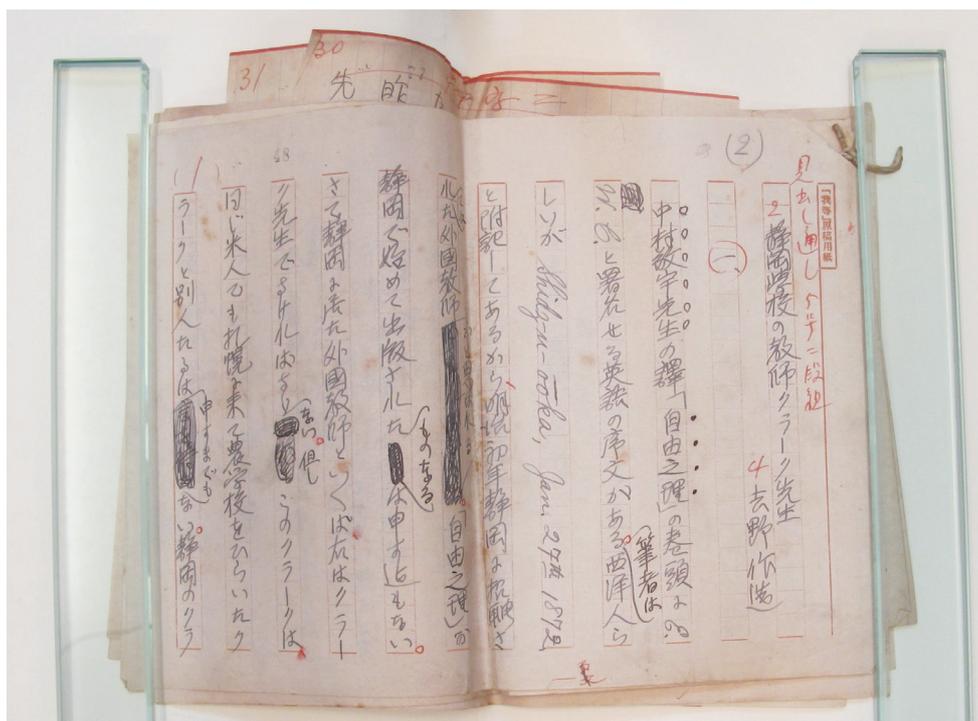
○吉野作造関係資料

吉野作造記念館は、大正デモクラシーをリードした大崎市古川出身の政治学者吉野作造（1878～1933）を顕彰する施設です。記念館の所蔵資料は、大きく吉野作造関係資料と、地域史資料に分けることができます。吉野作造関係資料は吉野の遺品、遺稿、書簡、著書などで、関係者からの寄贈に加え、吉野先生を記念する会（1962年発足）をはじめ地域の市民団体や個人の尽力により収集されたものが多くを占めます。1960～70年代にかけて旧古川市の図書館に資料を集約し保存・公開する体制が徐々に整い始め、1990年代に入って記念館建設計画が動き出すと、より本格的な資料の収集活動が行われました。

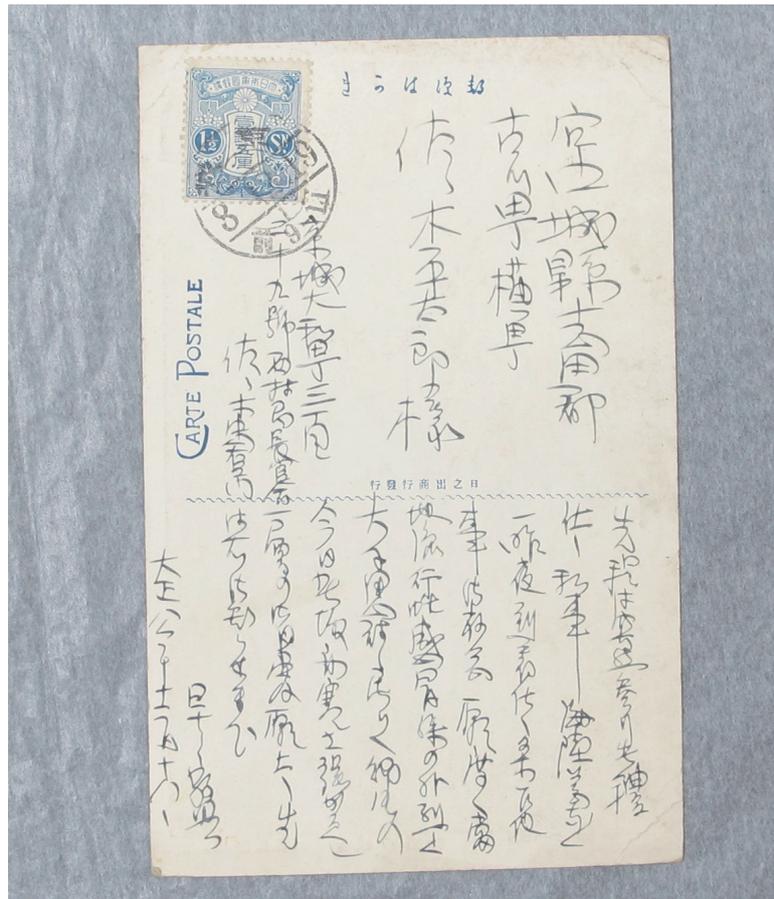
1995年の開館以降も、資料の収集は継続的に行われています。特に吉野長男の俊造氏をはじめとするご遺族からは、長年にわたり多くの資料をご寄贈いただきました。最近寄贈された主な資料として、明治文化研究会の関係資料があります。明治文化研究会は、幕末・明治期の書籍・雑誌・新聞など史資料の収集と保存を目指し、吉野、石井研堂、宮武外骨、尾佐竹猛らにより発足した民間の研

究団体です。この明治文化研究会の一員だった小松清（吉野三女の夫）が保管していた、機関誌『新旧時代』『明治文化研究』の原稿など323点に及ぶ資料群が、2022年に寄贈されました。2024年度までに内容の調査が概ね完了し、吉野の直筆原稿が11点、さらに誌上で未発表と思われる原稿の存在も確認できました。

原稿資料からは、活字では分からない執筆者たちの個性を伺うことができます。例えば吉野の場合、1本の原稿に何種類もの紙を雑多に使用し、ゲラ刷などの裏紙もよく用いていました（【写真1】）。当時の原稿用紙は既製品の他、雑誌などの媒体ごとに専用の用紙を作成するケースが多く、字数・行数もそれぞれ違いました。基本的に私的な趣味の団体だった明治文化研究会には専用の用紙などは無く、執筆者が各々手持ちの用紙に書いて寄稿していたようです。例えば石井研堂（1865～1943）は、「研堂用紙」と印刷された自分専用の用紙をわざわざ作っておきながら、マス目の無い裏側も使用し、両面に原稿を書いています。明治文化研究会は幅広い執筆陣と研究内容で知られますが、原稿の用紙や使い方からも、自由闊達な同会の雰囲気が伝わってきます。



【写真1】吉野作造「静岡学校の教師クラーク先生」原稿（1927年）。雑誌『我等』の原稿用紙ほか、複数の紙が用いられている。吉野作造記念館蔵。



【写真2】佐々木平太郎宛佐々木忠右衛門葉書（1919年12月18日）。吉野作造記念館蔵。

○地域史資料

吉野作造記念館は旧古川市域において唯一の歴史博物館でもあり、吉野と同時代の地域史資料も多く寄贈されました。そのうち橋平酒造店関係資料は、市内の老舗酒造家に保管されていた膨大な歴史資料群で、記念館では近代の書簡類を中心に300点以上を収蔵しています。本資料群のうち、第1回普通選挙関係郵便物については上廣歴史資料学研究部門のウェブコラムにてご紹介しましたが、もう一つ注目すべきものとして、佐々木忠右衛門（1892～1952）の書簡群があります。佐々木は古川出身で橋平酒造店当主の親戚にあたり、東京帝大を卒業後、内務省を経て朝鮮に渡り、朝鮮総督府官僚をつとめました。また吉野や、内務官僚・衆議院議員の守屋栄夫（1884～1973）などは同郷の先輩にあたり、長く親交がありました。本書簡群は、主にこの官僚時代に佐々木が橋平酒造店に送った書簡からなります。

親類あての私信ということもあり大半は他愛もない内容ですが、当時の朝鮮の様子を窺い知ることのできる書簡も含まれています。1919年11月17日の書簡は朝鮮総督府

への赴任内定を報告したのですが、「思ふに朝鮮は今平和と云ひ難きなり 然し渾身の努力を以て報国の為に尽したき一念に候」の文言があります。遡ること約半年前の1919年3月1日、日本植民地下朝鮮の最大の独立運動である三・一独立運動が発生しました。佐々木はこの事件後に行われた朝鮮総督府の大規模な人事異動で、朝鮮に赴任することになったのです。また1919年12月18日の葉書は京城（現在のソウル）到着後に送られたものですが、その中には「当地流行性感冒殊の外烈しく大に用心致し居り候」の一文が見えます。これは1918～20年に世界で猛威を振るったスペインかぜの朝鮮での大流行を指しています（【写真2】）。佐々木の最初の赴任先は京城の警察官講習所でしたが、ここは当時まさに集団感染が報じられていた場所でした。スペインかぜ流行に触れた書簡は、他にも複数あります。地域に残る手紙からこうした記述を見つける時、歴史上の大きな動きが私たちの生活と地続きであるということを、改めて生々しく実感させられます。

（吉野作造記念館 佐藤弘幸）

上廣歴史資料学研究部門 2025年1月～12月

歴史資料目録作成・撮影・資料分析

石巻市住吉勝又家資料、岩沼市竹駒神社馬事博物館所蔵資料、白石市渡辺家文書、白石市米竹家文書、白石市関谷家文書、大崎市佐藤家文書、大崎市保土原家文書、大河原町金ヶ瀬鈴木弥五右衛門家文書、加美町塩澤家文書（以上宮城県）須賀川市相楽家文書、須賀川市渡辺碩家資料、須賀川市遠藤家文書、会津美里町山口家文書（以上福島県）朝日町鈴木清助家文書（山形県）

古文書解説講座

- 岩出山古文書を読む会火曜講座（協力：部門、毎月2回、於大崎市図書館）
- 大河原古文書サークル（協力：部門、毎月1回、於大河原町中央公民館）
- 川北古文書学習会入門編・演習編（主催：部門、学期中毎週木曜日、於東北アジア研究センター）
- 白石古文書サークル（協力：部門、毎月1回、於白石市中央公民館）
- 白石市古文書解説講座（初級編）（主催：白石市中央公民館・部門、全10回、於白石市中央公民館）
- 仙台藩宿老後藤家文書研究会（協力：部門、毎月1回、於美里町近代文学館）

企画展示

- 山元町歴史民俗資料館企画展「歴史資料が語る近世・近代の社会—大條家文書・坂元村 記録の調査から—」（主催：山元町歴史民俗資料館・部門、2024年10月25日～2025年1月13日、於山元町歴史民俗資料館）
- 令和7年度大崎市有備館秋季企画展「松平定信の書写収集事業—真山白河家の歴史と書写資料—」（主催：大崎市教育委員会・部門、2025年9月18日～11月24日、於有備館）
- 白石城復元30周年記念企画展「資料でたどる～わたしたちの白石城～」（主催：白石市教育委員会・部門、2025年10月3日～12月21日、於白石城歴史探訪ミュージアム2階展示室）

講演会・セミナー

- 令和6年度博物館講座⑥ 荒武賢一郎「地域をかけめ

ぐる江戸時代の商人と流通」（主催・会場：山形県立博物館、協力：部門、1月18日）

- 令和7年度博物館講座① 荒武賢一郎「古文書から読み解く庄内大山の江戸時代」（主催・会場：山形県立博物館、協力：部門、6月7日）
- 歴史資料学講座：江戸時代史入門① 荒武賢一郎「支配のしくみ：領主制とは何か?」（主催・会場：三鷹市生涯学習センター・部門、9月15日）
- 大崎市企画展開催記念講演会 荒武賢一郎「真山白河家の歴史と銅山開発」（主催：大崎市教育委員会・部門、10月4日、大崎市岩出山公民館）
- 歴史資料学講座：江戸時代史入門② 荒武賢一郎「武士の仕事」（主催・会場：三鷹市生涯学習センター・部門、10月13日）
- 大崎市真山地区公民館「地域を学ぶ歴史講演会」 荒武賢一郎「江戸時代の真山地域と白河家の歴史」（主催・会場：大崎市真山地区公民館、11月1日）
- 歴史資料学講座：江戸時代史入門③ 荒武賢一郎「村役人の仕事」（主催・会場：三鷹市生涯学習センター・部門主催、11月10日）

出版

- 荒武賢一郎・野本禎司編『仙台藩の組織と政策』（岩田書院、2月）
- 渡辺家文書調査研究会編『渡辺家文書Ⅶ～現況目録7～』（白石市文化財調査報告書第66集、3月）
- 荒武賢一郎・岩出山古文書を読む会編『吾妻家文書を読む第二集—近世武士の由緒と戊辰戦争—』（東北大学東北アジア研究センター叢書第77号、12月）

共同研究

- 「近世東北アジアの交流と情報」
- 「須賀川地域史研究」
- 「会津地域の歴史資料学」

オンライン・ジャーナル『歴史資料学』第4巻第1号

- 野口英佑「「帝国日本」の政治経済と中辻喜次郎—営口の日本人ネットワーク分析—」（6月27日）

東北大学東北アジア研究センター
上廣歴史資料学研究部門ニューズレター

史の杜 No. 15
FUMI no MORI

◇発行日／2026年2月28日
◇編集・発行者／東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門
◇スタッフ／部門長：柳原敏昭 教授・副部門長：荒武賢一郎 助教：寺内由佳 根本みなみ
◇〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41番地 Tel/Fax 022-795-6084
◇URL <https://uehiro-tohoku.net/>
◇デザイン・印刷／株式会社 東誠社